

# フィリピン・マニラにおける諸大学視察レポート

— 女性学インスティテュートの相互連携交流事業を見据えて —

横 田 恵 子

## 1. はじめに

フィリピンの対抗政治運動やNPOセクターによるアクティビズムは、独自のノウハウをもって洗練され、日本の開発学や教育実践、NPO実践などに多大な影響を与えている。女性に関する運動も例外ではない。今回、報告者は、津田ヨランダ英文学科助教授とともに、近い将来に本学の女性学インスティテュートが教育や研究の面で連携・協力を行う可能性を含んで、マニラにある3つの大学の女性学センターを視察、将来的な連携についての可能性を話し合った。以下はその経緯についての報告である。

## 2. 視察報告

### 2-1. 国立フィリピン大学女性学センター

2006年8月1日、私たちは国立フィリピン大学女性学センター (University of the Philippines, Center for Women's Studies、以下、UP 女性学センターと略記) を訪問した。

最初に應對してくださったのは、ディレクターの Carolyn I. Sobritchea 先生であった。Sobritchea 先生は本年6月までお茶の水女子大学の客員教員として滞日され、マニラに戻られたばかりである。また、日本のフェミニストの方々とも公私に渡って深く長い交友関係を結んでおられる。このような知日派とし

での背景もあり、出だしから話し合いは大変スムーズに進んだ。

UP 女性学センターは1988年に創立された。UP は、フィリピン全土に9つのキャンパスを持っており、ケソンシティにあるこのセンターは、それらのキャンパスにある下部組織の統括本部としての役割も担っている。メンバーの多くは研究者であるとともに70年代から80年代にかけてのアクティビストとして活躍した人々でもある。現在に至るまで、コミュニティワークや政策提言などの活動を在野のフェミニストグループと連携している。

9つある各キャンパスの下部組織は、それぞれに特徴を持つ。例えば、ロス・バノス・キャンパスでは「農業や開発とジェンダー」の問題を中心に据えているし、イロイロ・キャンパスでは「貧困と女性」、セブ・キャンパスでは充実した心理学スタッフによりDVの問題が扱われている。デイリマン・キャンパスにある医学部は「女性と健康」の研究で成果をあげており、女性の視点から医療倫理を構築する試みを行っている。また、バギオ・キャンパスでは移民の問題を中心に扱っている。

UP 女性学センターは基本的に研究機関であり、教育活動は行っていない。(ちなみに教育的機能を主に担っているのは同じキャンパスにあるソーシャルワーク学部であり、その中の女性学インスティテュートがジェンダー・プログラムを有する。) 研究機関としての機能は、(1) 出版活動、(2) カリキュラム開発のためのトレーニングやセミナー開催、そして(3) アジア・太平洋地域諸国を中心としたグローバルな連携、の3点が主要なものである。

また、女性学のみならず、アジア研究の分野ではサンフランシスコ州立大学やサンディエゴ州立大学との提携関係があるとのことであった。

以上のような概要を伺ったあと、話し合いは具体的な今後の連携に関するものとなった。結果として、将来的には正式な提携の可能性を視野に入れつつも、まずはお互いに小さな一歩からはじめることで合意を得た。UP 女性学センターは、すでにお茶の水女子大学や上智大学、ICU との提携実績があるが、それ以外にも日本各地からの研究者を客員研究員として個人レベルでも受け入れ

ている。神戸女学院との間でも、正式な提携を待たずに短期で研究者が滞在・もしくは相互交流することは可能であろう、との見解を得た。

ちなみに本センターで受け入れられる研究者は、上記の9つのキャンパスで展開している多様なプログラムを個人の研究テーマに応じて受け入れることができる。基本的には、アメリカの大学が要求するような機関への多額の費用(チャージ)は請求されない。滞在する研究者が負う責務は、ひとつかふたつの講義の担当のみである。UP側からは基本的な居住場所の確保と図書館の使用が保障される。

またそれ以外にも、日本側でいくつかの大学が連携して、日本人研究者をコーディネーターとして10日間程度の集中プログラム(講義やツアー、ワークショップを含む)をパッケージ化して行うことも可能ではないか、という展望も示された。こちら側から神戸女学院の学部構成と学科内容を説明すると、「特に心理学や福祉学との連携はトピックとして関心がある」というコメントを得た。

最終的に、この話し合いではまずは(1)共同研究の開始、(2)研究者招聘によるレクチャー、の二点から取り掛かり、正式提携が可能になった後に、学生間相互交流について改めて検討する、ということになった。

その後午後1時より4時まで、津田助教授と筆者はそれぞれに講義を行った。取り上げたテーマは「日本におけるフィリピン女性のトラフィッキングの実態(津田)」、「日本におけるHIV感染と滞日外国人問題(横田)」であった。多くの学部学生および関連教員の参加を得て、白熱した議論が行われたのが印象的であった。

4時から副学長であるFlorinda, D. E. MATEO博士とお会いすることができ、将来的に正式な提携となった場合の手続きや書類のサンプルをいただくことができた。

## 2-2. ミリアム・カレッジ (Milliam College)

翌8月2日には、ミリアム・カレッジを訪問した。ミリアム・カレッジは、1926年にメリノール修道会（ニューヨーク）からのミッションによって作られた女性教育プログラムに端を発する。その後数十年はメリノール・カレッジを称していたが1989年にミリアム・カレッジと改称、小学校から大学院まで一貫してキリスト教教育を基盤としたリベラル・アーツ教育を推進している。学部教育はカレッジを称しているが、理系・文系そしてアート（音楽とダンス）をバランス良く配している。教育学や移民研究、環境問題に力を入れており、音楽学科のオーケストラも地域に貢献している。教育理念・規模・学部構成などは神戸女学院に似たものを感じた。

私たちは最初に Women And Gender Institute (WAGI) を訪問、ディレクターの Aurola Javate De Dios 氏および WAGI のスタッフと面会した。WAGI は環境問題、ソーシャルアクション、平和構築研究、ジェンダー平等という4つのアドボカシーセンターを持っており、これらを中心に機能する研究機関である。特にジェンダーや開発とかかわる視点からさまざまな社会問題を読み解く視点を重視しているという。WAGI 自体は教育機能を持たないが、学内教育には関与しており、さらに学外ネットワークの形成・維持機能も持つ。また、UPと同様に多くの研究所員は、70年代のアクティビストでもあり、それぞれが国際機関と共同で調査研究を行っている、という説明も印象的であった。「女性の人権」など、トピック別に短期集中のサマーコースも開催しているとのことであった。今後も、「女性の人権」「フェミニスト経済学」「環境問題」などの先端的な領域での活動を担っていくという。また、地政学的な見地から、アジア～オセアニアの中での視点を持つ事の重要性も強調され、オーストラリアや韓国の大学との提携を試みている現状についての説明も得た。アドボカシーセンターレベルでの教員相互交流などの可能性について、前向きに話し合いが行われた。

### 2-3. アサンプション・カレッジ

8月3日には、アサンプション・カレッジを訪問した。大阪府にある被昇天女子学院は、同系列にあたる。アサンプション・カレッジは、マニラ中心部、屈指の高級地区であるマカティに立地しており、都会の中でありながら、広大な緑に覆われた閑静なキャンパスが印象的であった。学生たちの印象は、今回訪問した三校の中で一番おっとりとしており、親しみやすいものであった。学院自体、日本の被昇天学院高等学校から毎年学生を受け入れていることもあり、日本や日本人に対する慣れもあるようだ。この大学には、女性学センターという研究機関はないが、女子大学の使命として、「社会正義と平和」「女性問題」「グローバリゼーション」「環境問題」という4つのグローバルな社会問題について考えさせる、という教育の支柱を掲げている。女性が、より覚醒し、社会問題の解決に関わるような存在になること、社会の状況により責任ある存在になることが肝要である、ということがシスターによって強調された。

アサンプション・カレッジの特徴としては、完成度の高いESLプログラムもあげられる。韓国などからは、欧米で英語研修をするより安くて効率がよい、ということで、すでに多くの短期留学生在が滞在しているようであった。ただし、経済成長を遂げ、脱工業化社会へと脱皮した東アジアからの女子学生の訪問・滞在は、その数が多くなるにつれ、異なった問題を起こすこともある。シスターたちにとっては、高度消費社会での価値観や生活に慣れきった東アジアからの若い女性たちの振る舞いが、時には目に余ることもあるようであった。

### 3. おわりに

短期間の滞在・視察訪問ではあったが、今後についていくつかの展望を得る事が出来た。英語圏であるフィリピンにおいて相互連携を進めることで、神戸女学院女性学インスティテュート所員も、その研究フィールドを東南アジアに広げる事が出来る。また、学生たちにとっても、多様な女性のありようや価値を実感出来る場となるはずである。まずは、教員同士の相互交流、共同研究の

可能性を探ることが第一であろう。これをきっかけに今後、アジアにおける女性研究を複眼的な視点を得て進めていく可能性を考えてみたい。